

D.H. ロレンスの書簡統計データ¹⁾

—Dears, Yours and Signatures—

佐藤 治夫

A statistical analysis of D.H. Lawrence's letters

—Dears, Yours and Signatures—

Haruo Sato

Abstract

During his 46 years of life, D.H. Lawrence wrote 5,538 letters and postcards. The present study numerically analyzed the openings and closings of his letters. The results clearly indicate that the physical characteristics, or anatomy, of his letters/postcards are indicative of his likes/dislikes and/or his closeness to the recipients. The data obtained will be one the most important clues in the analysis of his relationship with the hostile world he thought he himself had been thrown into.

Key words : D.H. Lawrence, Letters, Signatures

ロレンス書簡研究概要

ロレンス (David Herbert Lawrence 1885-1930) がその比較的短い生涯に書いた 5,538 通もの書簡²⁾は, D.H. ロレンス書簡研究グループ (D.H. Lawrence Study Group) により, 付随する書誌データが, 書簡本文とともに機械可読形式に変換されている。このデータ群は,

<B Vol-1>

<A Let. No. 1>

{[J.H. Haywood Ltd.,]*}

{[September? 1901]}

{[Text : Lawrence-Gelder 70-1.]}

{[3 Walker Street, Eastwood]}

{[September? 1901]}

{[Gentlemen,]**}

書簡本文 [省略]

{[Trusting to receive your favourable reply, I beg to remain, Gentlemen,]}

{[Yours obediently,]**}

{[D.H. Lawrence]****}

という形式を採っている。データ前後の{ } [] はコンコーダンス作成のための埋め込みマーカーである。今回は, このうち, addressee (*), opening (:*), closing (**), signature (****) についての分析を行った。

ロレンスの書簡は, 歳を重ねるにつれて増加するのは当然だが, 書いた本数は, 彼が生きていた激動の人生・時代そのものを反映する。図 1 に示した年度別の書簡数を見ると, 1911 年から 1912 年に書けての 2 年間は, 英国から駆け落ち同然で, 実家がドイツのリヒトホーヘン家の

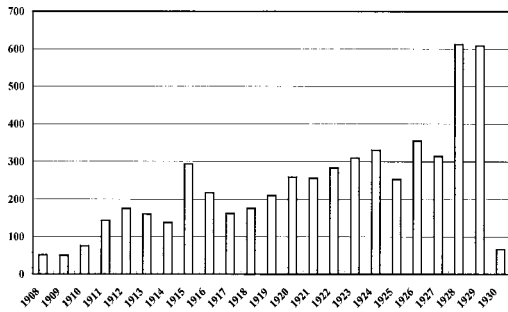


図1 D.H. ロレンスによる書簡の年間通数

フリーダと結婚した時期³⁾であり、1910年の75通から1912年の175通へと、第一期の困窮時代におけるロレンスの状況を示すものと考えられる。

また、第一次大戦(1914年7月28日から1918年11月11日)の勃発とともに始まる、英国に幽閉された格好となり、妻の実家である、敵国ドイツのリヒトホーフエン家からのわずかな仕送りさえも途絶えたロレンス夫妻の状況⁴⁾までも概観する手がかりとなる。

ロレンスの書簡の特徴は、遺されている彼のメモ帳⁵⁾にも見られる、その几帳面さにあると思われる。遠隔地との唯一の通信手段が、手紙・葉書であったこの作家は、実にこまめに手紙を書いている。しかしながら、大量に書くことから、書簡本文以外の部分は、日付や曜日まで案外誤っている場合も多い。誤らないのは、書簡の受取り人との、自分との関係である。本研究では、書出し部分(Dear部)、結び部分(Sincerely部)、署名部分(D.H. LawrenceとDHL)の3つの要素について、書簡の受取り頻度が高い宛先(表1)の中から6名を対象として解析を行った。

Dears, Yours and Signatures

最も多く書簡を受取ったのは、ロレンスが生涯付き合ったコテリアンスキー(S.S. Koteliansky)であり、2位のセッカー(Martin Secker)

表1 書簡の受取り30回以上の宛先リスト

Addressee	DHL sent
S.S. Koteliansky	348
Martin Secker	210
J.B. Pinker	176
Catherine Carswell	169
Louie Burrows	166
Giuseppe Orioli	161
Robert Mountsier	160
Ada Clarke	156
Emily King	148
Hon. Dorothy Brett	133
Edward Garnett	127
Nancy Pearn	117
Thomas Seltzer	117
Culrtis Brown	96
Mabel Dodge Luhan	95
Laurence Pollinger	92
Lady Cynthia Asquith	89
Baroness Anna von Richthofen	88
Lady Ottoline Morrell	83
Earl Brewster	70
John Middleton Murry	62
Arthur McLeod	61
Charles Lahr	60
Amy Lowell	53
Edward Marsh	52
Jessie Chambers	52
Else Jaffe	49
Margaret King	48
Gertrude Cooper	39
Enid Hilton	38
Max Mohr	35
Willard Johnson	34
Earl and Achsah Brewster	32
Mark Gertler	32
Benjamin Huebsch	31
Mabel Dodge Sterne	31
Dollie Radford	30
Witter Bynner	30

D.H. ロレンスの書簡統計データ

の210回を大きく上回る348回であった。3位のピンカー (J.B. Pinker) の176回を含めると、全部で734通にもおよび、全体の1割を超えている。この3名に対するロレンスの書簡の最初と最期は以下のようにになっている (括弧内は書簡番号)。

名前	最初の書簡	最期の書簡
S.S. Kotlianski	5-Aug-14(772)	9-Feb-30(5517)
Martin Secker	12-Jun-11(274)	9-Jan-30(5477)
J.B. Pinker	19-Oct-13(664)	15-Feb-22(2446)

このうちセッカーとピンカーは、ロレンス作品の出版に関っていた⁶⁾出版関係者であり、また、コテリアンスキーは、ロレンス生涯の友人であり、ロレンスが第一次世界大戦の勃発を知ったのも、コテリアンスキーと一緒に徒歩旅行して

いたときだったくらいの親友である。これら三つの要素の解析 (表2~4) によって、ロレンスと各人の関係が明らかになってくる。

書出し Dears

書出しのバリエーションを回数ごとにまとめた表2によると、コテリアンスキー、セッカー、ピンカーに対するロレンスの距離感が推察できる。参照すべきは、ロレンスの書簡全体での、書出しの傾向である。ただし表5で示したように、FormatでNONE (なし) は、葉書などでスペースがなかったり、単純にメモ程度と考えた場合には、書出しはつけないので、深い意味は無いかもしれない。しかし本研究では、これらを「書出しを省略しても構わない親しい相手」として考えるので、絶対に親しい相手にしか書

表2 D.H. ロレンスの書簡中の書出し分類

Dears

S.S. Kotlianski		Martin Secker		J.B. Pinker		Catherine Carswell		Louie Burrows	
226	My dear Kot.	187	Dear Secker	90	Dear Pinker	95	My dear Catherine	84	My dear Lou
51	Dear Kot	1	Dear Sir	77	My Dear Pinker	21	Dear Catherine	14	My dear Louie
7	Dear Kotlianski			2	Dear Mr Pinker	2	My dear Cath.	9	My dear Louise
1	Caro mio							7	French
1	Kot							6	Dear Louie
1	Mein lieber Kot							3	Dear Lou
								2	Dear Louisa
								1	Carissima
								1	Chere Louise
								1	Dear L.
								1	Dear Little Ousel
								1	My dear Barbara
								1	My dear Chatieuse
								1	My Louie
61	None	22	None	7	None	51	None	34	None
Total 348		210		176		169		166	

表3 D.H. ロレンスの書簡中の結び分類

Yours									
S.S. Koteliansky		Martin Secker		J.B. Pinker		Catherine Carswell		Louie Burrows	
28	Yours	70	Yrs	61	Yours	15	Love from xxx	20	<i>French</i>
26	<i>French</i> *	14	<i>Italian</i>	46	Yrs	8	<i>Italian</i>	19	<i>Italian</i>
18	<i>German</i> *	6	<i>German</i>	29	Yours Sincerely	8	Frieda sends love	14	Good bye xxx
17	<i>Italian</i> *	6	Best Wishes	1	I am afraid I am an infernal nuisance—seems my fate to be such.	6	With love xxx	9	Love
15	Yrs	5	Regards to xxx	1	Regards from xxx	6	Yrs	8	Vale
8	Many xxx	4	<i>French</i>	1	Yours faithfully	5	<i>French</i>	7	I kiss xxx
7	Love	4	Ever.			4	<i>German</i>	7	Yours
7	Vale	4	Yours			4	Love	7	Yrs
5	Greet xxx	2	Greetings			4	Yours	6	Good night xxx
4	Ever	1	All good wishes			3	Many greetings xxx	4	Love xxx
2	Remember me xxx.	1	Be Well			1	a million good wishes.	4	With love xxx
1	Best of greetings for xxx	1	Hope all's well!			1	all blessings to you both	3	Adieu.
1	Frieda greets you	1	Sempre			1	ever.	3	Farewell.
1	hastily.	1	Sincerely			1	Greet you all.	3	My love xxx
1	I feel we shall meet again soon.	1	Vale			1	Haste	2	I am Yours
1	The world is at an end.	1	Yours Sincerely			1	Let us know how you are—our love to you both.	2	I am Yrs
1	This in haste.					1	Sempre	1	German
1	Very kind regards to xxx							1	A Noel
1	With greetings from xxx							1	and am Yrs.
1	With love from both of us							1	Forgive me
1	With many thanks and greetings							1	Good evening
1	Write again soon. Frieda greets you.							1	I am Yrs Sincerely
1	Yours sincerely							1	I give you my love
								1	I loathe signing my name to this.
								1	Here's my mouth.
								1	Good luck for the holiday.
								1	Regards
								1	Till I see you farewell
								1	Thine
								1	Your lover
								1	Vale te
								1	Yours Sincerely.
199	None	88	None	37	None	99	None	32	none
Total 348		210		176		169		166	

* French, German, Italian=written in the language xxx=continued with a variation

表 4 D.H. ロレンスの書簡中の署名分類

Signatures

S.S. Koteliansky		Martin Secker		J.B. Pinker		Catherine Carswell		Louie Burrows		Baroness Anna von Richthofen	
119	D.H. Lawrence	130	D.H. Lawrence	171	D.H. Lawrence	60	D.H. Lawrence	85	D.H. Lawrence	8	D.H. Lawrence
224	DHL	79	DHL	5	DHL	106	DHL	77	DHL	77	DHL
5	None	1	None			3	None	4	None	3	None
Total 348		210		176		169		166		88	

表 5

Format	Number of times	Example
Italian	25	Cari Amici
German	43	Meine liebe Schwiegermutter
Others	14	Ma chere Lou,
Dear Sir	44	Dear Sir
Dear NAME	3116	Dear Jack,
My dear NAME	1077	My dear Ada
Dearest XXX	3	Dearest Mab,
NONE	1216	
5538		

かないイタリア語、ドイツ語、他の言語などの回数を加えると、2,400回強が親しさを表す書出しであり、細かく分類ができていない、Dear+NAME部分のうち、Dear+ニックネームを追加すると、ロレンスの書簡の送り先のかなりの数が「親しい」関係であることを示している。

こうした見解を採ると、特に興味深いのは、ロレンスからの、出版代理人セッカーに対する距離であり、一番苦しかった大戦末期に知合った相手⁷⁾であり、ロレンスの詩集の出版にも力を貸してくれた相手であるにももかかわらず、最初の手紙の書出しは、Dear Sir だったのは当然であるが、終生それ以後187通の書簡すべてでDear Secker で通した点である。決して、コ

テリアンスキー（コット）やピンカーのようにMy dear+xxxにはならないところが、公私ともにロレンスと付合っていた本人への対応としては奇異な感がある。身近に居ないで、単に、ロレンスにとっての利益がある相手というだけでは、気に入られないものなのだろう。

確かに、英国での出版代理人で友人でもあるピンカーについては、第一次世界大戦中に極度の経済的苦境に立たされたロレンスに、金を貸して凌がせた友人たちの中に入っている⁸⁾こともあり、セッカーに対する時よりは当然のことながら書出しが優しい。

翻訳家コテリアンスキーについては、ロレンスの親友であり、最初の“Dear Koteliansky,”にて始まった交際も、2ヵ月後の書簡には、“My dear Kot,”（書簡番号794）へと変貌を遂げている。参考のために表2～4に、通常の友人の代表としてキャサリン・カーズウエル、妻のフリーダ以外で一番親しかった（というか懐かしかったのかも知れない）元婚約者のルイ・パロウズのデータを追加している。ロレンス書簡の書出しは、多彩であればあるほど、ロレンスと親しい間柄であることを表しているかのように見えるが、結びとの関係も考察に値するであろう。

結び Yours

ロレンス書簡本分以外で最も読んでいて楽し

いのは、結びの部分である。表3に見られるように、ドイツ語、イタリア語、フランス語を操るロレンスならではのバリエーションが見られる。ラテン語の Vale te は、各国語に入れるのは抵抗があるので、ロレンスの世代では英国のインテリはラテン語が理解できて当然のことであるので、英語の結びと同じ扱いとしている。

ここでも、多様な結びの言葉で突出しているのは、コテリアンスキー宛の書簡であり、ロレンス夫妻との親しい付き合いから、妻フリーダからも宜しくとの添書きも散見している。また各国語での結びが多いのも、コテリアンスキーとの友情の深さを示している。特徴的なのは、結びの言葉が入っていない書簡が、コテリアンスキーの場合には二百回近くあり、友人としての付き合いの性質上、葉書も60通と多かった(その内48回は結びの言葉なし)ためであろう。

書出して、親しさが最も薄かったように見えたセッカーが、結びではピンカーに対して「盛返して」いるのは、実に不思議な現象である。ロレンスは、ピンカー宛の書簡では、決して外国語を結びには使用しておらず、決まりきった Yours, Yrs に「こだわって」いるかに見える。それに対してセッカーに対しては、ピンカー宛に書簡を送るときに決して見せない、心の動きを示すことが多い外国語による結び、A rivederci, Au revoir, Wiedersehen などを用いているのである。コテリアンスキーに対しては7度使用している Vale まで、セッカーに使う理由は謎である。

カーズウェルに対しての結びは、友人としてのそれを出ないロレンスとして標準的なものであり、極めて普通の結びの語句が並んでいる。対照的に婚約者であったバロウズ⁹⁾への書簡の結びは、激烈な感情をむき出しにしたものが多く、中でも“Here's my mouth.”は傑作であろう。

署名 Signatures

相手に伝言を託すか、自分が出向くか、手紙を書く以外に、通信手段がないロレンスの書簡は、情報交換だけでなく、原稿用紙、請求書、送り状、領収書など様々な役割を果たしている。このために、書簡を書くときに、用件がいくつかある場合に、ロレンスが最も多用した方法は、書簡の内容を、P.S.「追伸」形式で分割することである。ロレンスの追伸の特徴は、書簡本文の末尾に、署名(D.H. Lawrence か DHL)を付けた後に、追伸文が追加されて、また署名を入れてから、その後にもまた継ぎ足すという、重層構造ともいえる構成の複雑さである。勿論、P.S.と書く場合もあるが、あまりこだわらずに書いたのが実情のようである。いずれの場合も、追伸部分にも、署名がはいることが多いのである。

この複雑な構成の手助けの役割もする署名は、本文末尾が D.H. Lawrence であれば、追伸文の末尾には DHL (D.H.L. も含む)が入る場合が多い。しかし、まれではあるが D.H. Lawrence が繰返されることもある。本文の署名が DHL である場合には、追伸文の署名が D.H. Lawrence であることはない。例としては、書簡番号 2363 では、本文+D.H. Lawrence+追伸文+DHL+追伸文+DHL+追伸文、という複雑な構成となっている。流石に一番末尾に、DHL とは入れていない。

署名の書き方が、2種類しかない上に、複数回署名をすることもあるために、宛先と署名の種類を付合わせるに当たっては、本文に付与された署名を対象としている。正式な署名は D.H. Lawrence であるから、勿論、DHL の署名を、初めて書簡を送る相手に書くわけではなく、親しい間柄ほど、DHL にするという前提で考えている。

表4には、署名の種類と回数が示されているが、追加されているロレンスの妻フリーダ・ロ

レンスの母、アナ・フォン・リヒトホーフエンに対する書簡の署名が、圧倒的に DHL であることが見て取れる。

カーズウェルとバロウズを比較すると、ややカーズウェルの方に DHL が集中しているが、これは婚約者に対して気を遣うロレンスを暗示しているものと考えられよう。

ロレンスの親友コテリアンスキー宛には、DHL が D.H. Lawrence を予想通りに上回っている。書出しと結びから考えられる解釈が矛盾したように見えた、セッカーとピンカーに宛てた書簡グループの比較では、セッカーの方に署名 DHL が集中している。

推測にすぎないが、書出し部分では、Dear Secker で統一したかに見えたロレンス書簡ではあるが、それにしては結び部分の示す対人関係と一致しないのは、ロレンスが、常に周囲の者に気遣いをする、優柔不断の性格だったからではないか。ロレンスの本心は、セッカーを受入れておらず、それ故にかえって、結びで冷たい感情を隠すために、大切な友人のごとくおどけて見せているのであろうか。

むすび

ロレンス書簡の本文以外の構成要素のうちから、書出し部分、結び部分、そして署名部分に焦点を当てた研究は、このように僅かな手がかかりでも、ロレンスが周囲の友人・知人をどのように受入れていたかを、示す可能性がある。このような本文以外でも膨大なデータ量に加えて、当然のことながら、金の無心、何か重大な

ことを依頼するときなどは、書出しや結びがどのように変化するか、変わらないのかなど、本文と連動した研究も必要となるであろう。

注

- 1) 本研究は、著者の所属する D.H. ロレンス書簡研究グループ (D.H. Lawrence Study Group) (研究代表者：須田理恵—日本大学、相良英明—鶴見大学、市川 仁—中央学院大学) の研究の一部を構成し、同グループの資料を一部使用している。
- 2) 本文は *Letters of D.H. Lawrence*, Cambridge U.P. 19879-1993 VOLS. 1-7 に拠っており、書簡番号は同シリーズの書簡集に拠る。
- 3) 佐藤治夫 (2001) D.H. ロレンスの国外脱出. 研究紀要 (日本大学歯学部一般教育) 29, 71-80
- 4) 佐藤治夫 (2003) 第一次大戦と D.H. ロレンス—資金繰りの日々. 日本大学歯学部紀要 31, 73-77
- 5) 佐藤治夫 (2004) D.H. ロレンスの収支決算—*D. H. Lawrence Memoranda Book* に見られる収支. 日本大学歯学部紀要 32, 65-72
- 6) 佐藤治夫 (1999) D.H. ロレンスとセッカー—出版人と作家の邂逅. 英米文化 29, 73-87
- 7) 書簡番号 1636 Martin Secker 宛 1918 年 9 月 13 日
- 8) Poplawski P (1996) *D.H. Lawrence—A Reference Companion*. Greenwood 41
- 9) 特に、親密な関係にあった人々に、ロレンスは、男女を問わず一つの文に英語だけでなく、“I kiss you bon soir—” (書簡番号 264) のように外国語も気にせず使用するので、例えば判断の基準として、先に出てきた部分を使用することとし、“I kiss you xxx” に分類している。